

戦後山名大教会の台湾伝道の復興

日本人布教師の戦後初の渡台

前回(1月号)では、台湾伝道庁の三濱善朗8代庁長による戦後の台湾伝道復興のさまざまな活動について紹介した。三濱庁長は1967(昭和42)年1月26日のお運びで任命を受けた。当時、特に外国人の出入国に厳しかった台湾で、布教ビザを不思議なほどスムーズに取得し、同年8月15日に戦後の台湾庁長として初めて台湾の地を踏むことができた。そして、台湾伝道庁の建設や現地信者の育成などに尽力したのである。しかし実は、戦後初の庁長よりもずっと前に渡台した日本人布教師がいる。それが、後の嘉義東門教会3代会長をつとめることになった加藤勇であった。加藤勇は、台湾人信者のおたすけに情熱を注ぎ、「炎の女伝道者」と言われた加藤さん嘉義東門教会初代会長の孫にあたる。

加藤勇が戦後初めて渡台したのは1953(昭和28)年、戦後8年も経たない頃である。台湾では、新しい統治者となった中華民国政府と、日本統治を50年間経験した台湾人との間に、大きな亀裂が生じ、それが1949年の二二八事件によって暴力事件として顕在化した。政府は軍をもって民衆を抑え込むとともに、その後は戒厳令を敷き、政治的弾圧が始まっていた。多くの無実の知識人が投獄、処刑され「白色テロ」と呼ばれる暗黒の日々が続いていた。このような社会的混乱が続いている台湾に、日本人布教師の入国が許可されたことは特筆すべきである。この戦後初の日本人布教師の渡台について、当時の海外伝道部報でも以下のように報じられている。

終戦後初の渡台

台湾嘉義東門教会は会長加藤鍋吉^{マツ}氏引揚後教会の経営は原地人の手に継承され、維持せられて来たのであるが、七十年祭を控えての布教活動の展開に会長子息加藤勇氏の渡台を要望されていたが、今度念願が叶い五月三十日の飛行機で渡台された。本部布教師の台湾渡航は終戦後初めてのことである。

(1953年『海外伝道部報』6号13頁)

台湾での加藤勇招聘の陳情

嘉義東門教会2代会長加藤鍋吉の家族は、日本への引き揚げが不可避であることになるギリギリまでどうにか台湾に滞在し続けられるよう奔走していた。そのため、戦後台湾が日本の統治を離れ、中華民国となってから一日も早く再び台湾の地を踏みたいと熱望し、日本国内で渡台に向けた手続きを進めていたことは想像に難くない。しかし、その思いは台湾に多く残された現地人信者も同じであった。そこで嘉義の有力者であり弁護士の黄宗焜(1910～1997)が、1952(昭和27)年9月に台湾省政府民政庁長宛に加藤勇の招聘について陳情している。ちなみに黄宗焜は、加藤鍋吉会長が終戦後息子の勇に命じて、羅有本布教所長や汪高山と共に、法人教会の接収を止めてもらうよう中華民国政府に陳情する等の提案をしたメンバーの1人であった。つまり黄は、戦前から嘉義東門教会を支える教会関係者で、知識エリートの現地人協力者であった。彼は、後に台湾省臨時省議会議員や立法委員、嘉義県長(知事)を2期務めるなど、嘉義を代表する政治的有力者になる。

筆者は、この時の陳情書を10年ほど前に台湾の公文書デジタルアーカイブで発見したので、ここで紹介しておく。大まかな内容は以下のとおりである(原文中国語)。

お伺い

民国41(1952)年9月23日
於嘉義市太平街60号

日本籍布教師・加藤勇氏が来台し道理を宣揚し、教えを広めることについて

1. 当該の日本籍布教師・加藤勇氏は日本統治時代に嘉義市太平街54号(旧称嘉義市東門宮前町5丁目27番)の天理教責任者であった。
 2. 当該責任者は過去に地域において多くの貢献をしてきた。特に注目すべきは我が国が古より有する道徳・礼儀・廉恥を宣揚し本省(台湾省)の同胞たちの思想を反共の意志へ開化させ、頗る堅強にさせた。昔布教をしていた時から常に反共の重要性を説き、実に私たちと同じ反共抗ロシア戦線に立つ、有力な闘士の一人である。
 3. 今年10月は天理教大祭の日であり、一般の信男信女がこの祭を盛大に祝うのに合わせ、再び来台し布教、並びに反共抗ロシアの重要性を宣揚することは一挙兩得である。
 4. 以上、謹んで申し上げます。ご指示をお願いいたします。
- 台湾省政府民政庁長 殿

黄宗焜 印

当時の社会情勢を反映した貴重な史料と言えるだろう。当時、台湾当局が外国人の入国に関して最も懸念していたことは、外国からの思想的影響であったことが窺える。中国古来の道徳や礼儀などの文化を宣揚し、反共で反ソ連の思想の持ち主であり、われわれと同じ同胞であるから、天理教布教師が宗教的祭典に訪れることは一挙兩得であると主張している。そして実際に、この陳情が民政庁で処理され、翌年5月に加藤勇の戦後初の渡台が実現した。

山名大教会の台湾伝道復興と伝道庁復興のかかわり

さて、では戦後初めて渡台した加藤勇はどのような人物なのだろうか。彼は戦後の山名大教会の台湾伝道復興の最重要人物の1人と言っても過言ではない。そして、ひいては戦後台湾伝道全体にとっても大きな影響を与えた人物である。

というのも、実は三濱庁長が台湾に赴任し、伝道庁の仮事務所探しに尽力してくれたのは、山名大教会所属の陳居住と嘉義東門教会とつながりがあった黄宗焜(当時立法委員)であった。このうち陳居住は、1972(昭和47)年5月に天理教が全国規模の法人として中央政府(内政部)に認可された「財団法人中国天理教總會」を設立した時に初代董事長となった。この財団法人の董事長及び董事たちは、すでに1968年9月に台北市政府に財団法人として認可されていた「山名大教会台北市佈道所」の役員をそのまま横すべりさせたものであった。これは、すでに認可された財団法人の役員を新しく設立する財団法人の役員としてそのまま任命することで、政府による身元調査などで新たな問題が生じることを避けるためだったのであろう。さらに、財団法人が設立されてから新しい伝道庁の建物が完成するまでの間、法人の住所は山名大教会台北市佈道所に置かれた。この財団法人の設立は、天理教が台湾で中央政府(内政部)の認可を得ることで、政府の不当な抑圧を避けるためには不可欠であり、当時まだ戒厳令下にあった台湾では重要なことだった。その財団法人設立にあたって、台湾伝道庁に先行してさまざまな手続きや動きを展開していた加藤勇をはじめとする、山名大教会関係者による戦後台湾伝道復興の功績はとても大きいと言える。

[参考文献]

加藤勇(1968)「台湾の道(四) 嘉義東門教会(山名)」『フォルモサ』4号59-86頁。